

Title	獨逸最近の社會學論(一)
Author(s)	米田, 庄太郎
Citation	經濟論叢 (1924), 18(3): 571-587
Issue Date	1924-03-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/128142
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 三 號 第 十 八 卷

大正三十三年三月一日發行

論 叢

- 所得稅の轉嫁……………法學博士 神戸 正雄
獨逸最近の社會學論……………文學博士 米田 庄太郎
獨占的海運同盟に對する政策……………法學士 小島 昌太郎
政治現象の本質……………法學士 恒 藤 恭
鎌倉時代の土地制度……………文學博士 三浦 周行

時 論

- 自作農創定事業の意義と效果……………法學博士 河田 嗣郎

說 苑

- 婚姻率に就いて……………經濟學士 岡崎 文規
名目派の貨幣論と貨幣の本質……………經濟學士 中西 仁三
客觀的勞賃論の史的發展……………經濟學士 森 耕二郎

雜 錄

- 勞働者負傷の原因調査……………法學博士 河田 嗣郎
照應の理論と社會及經濟統計……………經濟學士 蜷 川 虎三
フィジー島の原始共產制……………法學博士 河 上 肇

獨逸最近の社會學論 (一)

米田庄太郎

緒言

今や革命後の獨逸に於て、社會學の研究が大に勃興して居る。多數の大學に於ては、大戰前に於けると異なり、社會學の講義が盛んに行なはれ、ベルリン大學や新設のケルン大學などに於ては、特に社會學の教授さへ任命され、又 Das Institut für Sozialwissenschaften in Köln の如きものが新設され、而して多數の雜誌に於て、社會學上の論文が盛んに現はれ、尙ほ新たに Kölner Vierteljahrshefte für Sozial-Wissenschaften の如きものが發行され、殊に社會學上の重要な著作が續々公にされて來た。革命後の獨逸に於ける右の情況を、大革命後の佛國に於て近世社會學が生まれた(或は少なくとも著しき發達をなして來た)情況と比較して考へると、吾人は社會學史の研究上大に得る處があると思ふのであるが、併し此處には此の問題には觸れないで、只最近獨逸に於て社會學が勃興するに當て、盛んに論議されて居る一問題、即ち社會學の概念及び其の構成に關する問題、換言すれば社會學は如何なる學問である可く、又如何に構成或は組織さる可きやと

云ふ問題に就て、諸家の見解に批判的考察を加へるに止める。而して余は獨逸に於ける此の問題に關する論争を、批判的に考察することは、今や同じく社會學の眞面目な學問的な研究が、勃興せんとする我國に於て、甚だ有益であると信ずる。

抑々何れの國にありても、社會學の研究が發達する初めに於て、殊に學者の注意を惹く問題は社會學は一の新しき學問として成立し得るものであるが、或は特に社會學なる新しき學問を建設する必要があるかと云ふ問題、又之に伴ふて起る處の、社會學は如何なる學問として考へられ如何に組織或は構成さる可きかと云ふ問題である。而して今日獨逸に於ても此等の問題が盛んに論議されて居るのであるが、併し吾人は獨逸に於ける其等の問題に關する今日の論争に於て、特に注意す可きものがある。夫れは近頃獨逸に於て認識論、論理學及ぶ方法論、即ち學問論、(die Wissenschaftslehre) の研究が盛んに行はれ、新しき學問論の發達し來れる際に、革命の影響によりて社會學が勃興し、而して新しき學問論に結び付けて、右の問題が論究されて居ると云ふことである。されば吾人は今日の獨逸に於て行はれて居る處の、右の問題に關する論争を批判的に考察すると、社會學の學問論的研究上、學ぶ處少くないのである。否な社會學の學問論的研究は今日の獨逸の學界に於て最もよく發達して居るので、吾人は之を考察することによつて、此の問題の現狀を最もよく、又最も深く理解することが出来るのである。

但し革命後の獨逸に於て、社會學と云ふ語が急に流行語となり、而して社會學の研究は、大に勃興して來たが、併し夫れは突然起つた事ではないので、革命前に於ても社會學は徐々に發達して居た、否な種々なる社會的學や哲學の範圍内に於て、社會學上の諸問題は盛んに考究されて居たのである。而して又今日の獨逸の社會學は、革命前の獨逸の社會學と關係なしに新興せるものでなく、夫れに連續して、或は夫れを繼承して發達して居るのである。されば本論文に於て、革命後の今日の社會學の發達を考察せんとするに當つても、吾人は革命前の發達を無視することはない。否な之れに結び付けて考察せねばならないのである。併し余は此處には便宜上、革命後の社會學論争を考察の主題となし、而して革命前の社會學論に就ては、必要に應じて之れと結び付けて、論じ及ぼすこととする。

却說革命後の獨逸の社會學に就て、先づ一般的に注意す可きは、革命後の獨逸政府の最初の文部大臣ホツフマン氏、其の次の文部大臣ヘーニツシユ氏及び文部次官ベツケル氏等が、獨逸の大學教育を改造し更新する爲めに、獨逸の大學に社會學の教授職を設けんとしたことである。而して其の主旨を發表するや、學者間に大に論議が起つたのであるが、此處に右の文部省説に反對せる學者の代表的意見とも見做す可きフライブルヒ(イー・ペー)大學の史學教授にして、現代の獨逸に於ける史學の一家、ゲオルヒ、フォン、ペーロー氏の説を、先づ述べて本論文の端緒を開くこ

らとする。

フォン、ペーロー氏の社會學論 (其一)

フォン、ペーロー氏(Georg von Below)は、千九百十九年の終り頃、シュモラー年報に於て「教科としての社會學」と題する長論文を公にして、(Soziologie als Lehrfach. Ein kritischer Beitrag zur Hochschuleform.—Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich. 43. Jahrgang. Viertes Heft. 1919.) 上に述べし文部省説に反對し、大學に於て新に社會學の教授職を設ける必要なきことを論辯したのである。但し右の論文中、フォン、ペーロー氏が社會主義的文部省が、今日大學に社會學の教授職を新設せんとする眞意の如何に就て論評されて居ることや、其の他政治論に關する事は、純學問的に同氏の社會學論を評價せんとする余輩にとりて、あまり興味のないことであるから、總て之を看過し、只純學問的に重要と思はれる方面を考察するに止める。余は同氏の社會學論には賛成することが出来ないが、併し同氏の豊富なる歴史的智識を利用して書れたる右の論文は、社會學史の研究上有益なる智識を吾人に與へると思ふから、又右の論文は其の後小冊子としても刊行されて居るが、併し今日我國では容易に手に入らないから、又右の論文は新刊の獨逸の社會學書中にはよく引用されて居るから、此處に

余は讀者の便宜の爲めに、右の論文の大要(特に純學問的に重要と思はれる部分の大要)を稍々詳しく述べて置きたいと思ふ。

フオン、ペーロー氏の論文に於て、其の論述の順序上余輩の先づ注意す可きは、社會學的問題は永い以前から既に多數の學問に於て研究されて居るので、決して近頃に至つて始めて研究されたものでない事を、論證せんとする部分である。そうして余は社會學史の研究から見て、此の部分が甚だ有益であると考えるので、此處に先づ其の大要を稍々詳しく述べて置く。

夫れ學問界に於ては社會學は人間共同生活關係論(*die Lehre von den Gemeinschaftsbeziehungen der Menschen*)として定義されて居る。併しかかる定義からして、社會學の領域を考へる可きものは甚だ廣大にして、到底一科學の研究し盡くし得るものではないから、眞面目に社會學を研究せんとする人々は、其の領域に制限を加へることが必要であると考へた。かくてジムメルの如きは、社會學を共同生活關係の諸形式の研究に限らんとするのである。併しかゝる定義に就て考へるも、社會學の領域はあまりに廣く見定められてゐないかと云ふ疑ひは、直ちに起らざるを得ない。共同生活關係の形式は、只見掛上、共同生活一般から區別されるだけである。

いづれにして學問の歴史を考察せる人々は誰も、人間の共同生活關係は多數の學問によりて、觀察され研究されて居ること、又既に永い以前から、其れに學者の注意が向けられて居たことを

疑はないであらう。さればジムメルの如き博大な研究者が千九百八年に公にせる彼の「社會學」に於て、「個人の相互作用及び協働からして、歴史の現象を説明すること」が、比較的に新しきことであるが如くに述べて居るのは、不思議である。

今ジムメルが今日學問界に於て常例となれる考察法に對立させて排斥して居る考察法、即ち歴史的事實に隨ふて文化の内容、經濟の諸種類、倫理の諸規範等を、個人から或は個人の悟性及び利害から説明せんとし、而して夫れが成功しない場合には、直ちに形而上學的或は魔術的原因に訴へんとする考察法は、啓蒙時代、第十八世紀の考察法である。其の時代の人々は、歴史の現象を出来るだけ個人の意識的行動、個人の計畫及び奸智から説明せんとする強い傾向を、常に有つて居た。併し啓蒙主義は遂に、殊に浪漫主義的運動によつて擊退されたから、人々は遂に又其の歴史の現象説明の方法をも排斥したのである。啓蒙時代は歴史の現象の説明に於て、大なる一偏見を齎したことは、否めない。夫れ以前の諸時代に於ては、一層完全な方法が行はれてゐたので、而して今日の社會學者が大に尊重する處の適切なる觀察が、人間の共同生活關係に關して行はれて居たのである。併し啓蒙時代の學者が、其の見解の偏局であつたに拘らず、其の考察に於て甚だ熱誠にして、人間共同生活關係の智識を増進させたことも亦疑はれない。而して彼等の説明を、「社會學的」説明と稱することを否む可き理由は毫もないのである。成程彼等の説明は甚

だ偏局なものであつたが、しかも夫れは常に眞面目な熱誠な努力を意味するものであつた。第十九世紀の進行中、歴史に於ける無意識的勢力をあまりに偏重する事に反對し、而して意識的行動に注目せんとする傾向が起つて居るが、夫れは不當でない反動として一般に認められて居る。されば余輩は決して啓蒙主義の讃仰者でない、寧ろ歴史的事實の眞に學的な説明は、浪漫主義運動から始まれるものなるを認めんとするのである。かのジューメル（Jeu-mel）の如きも、若し浪漫主義運動をよく研究したならば、彼は必ず彼の「社會學的」説明を夫れに結び付けて考へ、而して「社會學」を甚だ若い新しい學問であるが如くには、決して考へなかつたであらうと思ふ。

浪漫主義は歴史的現象の淵源として、無意識的勢力、客觀的勢力を認めることによりて、個人の意識的行爲から、歴史的現象を偏局的に説明せんとする方針を排斥した。此の點に就ては浪漫主義の民族精神説を憶ひ起せば充分である。浪漫主義は一民族の法制、言語、藝術等は、總て其の民族の民族精神の顯現であると見たのである。今日では浪漫主義的民族精神説を一笑に附することが、多くの方面の人々の間に常例となつて居るが、併し夫れは實に第十九世紀が企だてた歴史的説明の全體の基礎を作つて居るので、而して又著名なるジューメル（Jeu-mel）の「社會學」も、夫れが有力有効である限りに於ては、矢張り同じ基礎の上に建てられて居るのである。但し余輩が右の如く考へる場合には、民族精神の概念を只限定されたる一民族の精神、只國家的に統一されたる一民

族の精神を意味するだけに限るのではなく、人類に於て一般に成立し得る諸般の共同團體の精神を包括的に意味するものと解するのである。

さはれ余輩は浪漫主義運動も、始めには矢張り或偏局性を帯びて居たことを認める。民族精神の靜かな無意識的作用をあまりに高調し、立法家の意識的完成的活動を排斥したのは、確かに浪漫主義の偏見であつた。併しかゝる偏見は浪漫主義運動の本質をなすものでない。而して今日一般に承認されて居る處の、個人が其の屬する共同團體に於て占める地位に關する多くの思想は、浪漫主義の時代から傳はつて居るのである。例へば浪漫主義者アダム、ミュラーが、一般的勢力によりて個人の規定されて居ること、早代によりて後代が影響されて居ること、傳説が各個人及び個々の具體的國家に與へる方針或は指導等に就て述べし見解は、今日廣く承認されて居る(但し余輩はミュラーの考へしよりも一層大なる役目を個人的因素に認めるのが正當であると思ふ)要するに余輩は、近世「社會學」の藏有する有力、有効なる部分は、主として浪漫主義に源を發するものと考へるのである。

浪漫主義の時代以來、學問の一般的進歩と共に、人間の從屬する共同生活關係の知識は、大に増進した。人々は其の時代に於て据へ付けられた土臺の上に、益々建築を續けた。殊に經濟的條件を大に考慮することは、重要な一進歩である。もつとも經濟的條件を重要視する傾向も、以

前には全く存在しなかつたのではない。ニーブールの「羅馬史」や、アイヒホルンの「獨逸私法論」を擧げるだけで、此の事を示すに充分である。さはれ近頃に至つて、經濟的條件を重要視することは、殊に必要となり、又可能となつたのである。而して今日尙ほ、嚴重に云へばマルクス説は、始めて人間が經濟的勢力に依存することを教へ、千八百四十七年の「共產主義宣言書」は、始めて之れに對する公式を與へたものと見る見解が、屢々唱へられて居るが、併し實際に於てマルクス以前に、既に豊富なる經濟史的文献が存し、又人間と經濟的關係との關係に關する明白なる思想が、多々説述されて居たのである。此の點に就ては、マルクス説は全く新しき何物をも説いて居ないので、只以前に唱へられて居たことを誇張し、そうして之を實際的政治的煽動に、有効に用ひ得られる一公式に於て、云ひ表はしたゞけである。「共產主義宣言書」は全く一般の經濟史的文献中の一に過ぎないもので、又まさしく其の事實によりて、夫れが浪漫主義の歴史研究に依存するものなることが示されて居る。而して社會主義者と同じく、浪漫主義の影響を受けた歴史學派や歴史經濟學派の人々も、大に經濟史的研究に力を注いで居るので、要するに現代の經濟史的研究は、浪漫主義の影響によりて諸方面に於て發達せるものである。されば歴史經濟學派は社會主義的文献に起源を發せるものと見るは謬見である。

今人間の經濟的關係が包括的に研究されるに至つて、人間共同生活關係の研究は、或意味で終

結したとも見做し得られるが、更に殆んど同時に、人間と地理的圈境との關係に就て、既に永い以前から行なはれて居た觀察が、地理學の建設によりて益々深められ、而して人類學や土俗學及び人類學等の發達によりて、人間と外界との關係は愈々完全に研究されて來たが、尙ほ千八百六十年代の始めに、ラツアルス及びシュタインタールによりて、新たに民族心理學が建設された。而して此の際民族心理學は、一見すれば新しき要求に應ずる爲めに建設されたる、全く新しき學問であるが如くに思はれるが、併し夫れも浪漫主義に淵源を發せるものにして、其の思想は既に浪漫主義の民族精神の思想中に孕まれて居るのである。

されど獨逸に於て發達せる右の諸研究或は諸學問よりも、更に多大なる要求を以て、夫れ以前から實證主義の社會學が、佛國に於て建設されて居た。此處に實證主義社會學の運動の特質を指示する爲めには、コント、バツクル及びスペンサーの名を擧ぐれば充分であると思ふ。而して歴史的生活、人間の共同生活關係を支配する法則を設定すると云ふのが、此の運動の特質である。もつとも其等の法則の設定は、只實證主義に於てのみ企だてられたものでは決してないので、かのマルクス説の如きも亦、殊に嚴格なる法則を提出した。しかも人間關係の合則的決定説は、實證主義の社會學に於て、最も豊富に最も多様に發展したのである。其等の實證主義者は嚴正なる經驗主義者であらんことを望み、彼等の提出せる法則は純經驗的觀察に基いて設定されたも

のと信じて居る。併し實際に於ては、彼等も粗笨な經驗論者の運命に陥つて居るので、彼等は決して彼等の言明するが如くに、囚はれない觀察に基いて立論して居るのではなく、實は一定のドグマに基いて立論して居るのである。而してコントの三狀態説は、宗教は人類の進歩と共に漸次に無用物となると見るに點に於て、啓蒙思想の殘痕を示して居る。スペンサーも亦、嚴密なる自然科學的方法を用ひて研究すると稱しつつ、實は矢張りマンチエスター主義の使徒として一種の獨斷を唱へて居たのである。

右に述べし如く、實證主義者の思想と啓蒙思想との間に、親しき關係の存するは疑はれないが、然るに他方に於ては實證主義は啓蒙思想に甚だ鋭く反對して居る。夫れは個人は共同團體及び一般的發達の進行に、個人格の意義が全く消失する程、根本的に依存すると見る點に於てである。浪漫主義は個人の活動に對して一定の餘地を残し、個人と共同團體との關係の規定に於て、尙ほ或物を保留したが、實證主義は個人格を全く否定し、只粗大なる勢力の支配のみを認めんとするのである。

佛國及び英國に於ては、實證主義は獨逸に於てよりも、大に流布し易かつた。是れ英佛二國にありては、浪漫主義に影響されたる諸學問内に於て、獨逸の有せしほど豊富な學問的文献が、發達して居なかつたからである。獨逸にありては、實證主義は斷然排斥された。獨逸は實際上實證

主義の必要を感じなかつた。是れ獨逸はより善きものを有つて居たからである。併し其後主として社會主義の大なる發達に伴ふて、(確かに夫ればかりでないが)實證主義は獨逸に於て始めて勢力を得て來た。しかも決して主要なる勢力とはならなかつた。

獨逸に於て社會主義の發達し來れる時代は、是れ獨逸人が人格の總ての意義を否認することに於て、甚だ明敏なる見解を確立し得るものゝ如くに考へ、而して大なる熱心を以て、人間の共同團體生活を支配する法則を構想せんとせる時代である。而して獨逸に於ける實證主義運動は、主として實際的な政治的或は社會的目的を達せんが爲めに行はれ、現實的利益を其の隠れたる原動力となせるものである。併し當時廣まれる偏局な經驗主義から生起せる、此の時代の一定の一般的傾向も亦、此の運動の發達の上に其の一原因として作用した。而して然らざれば他の方針に進んだと思はれる多くの學者も、自然此の運動に引き込まれたのである。

此の運動は夫れに反對する諸運動をして、自己の見地の強大なる辯護、自己反省及び自己特有の思想の強健なる建設を必要ならしめた以上、有益でなかつたとは云はれない。是れは夫れ自身不正當な運動が、屢々有益なる結果を生ずることある一例である。而して實證主義運動に對する右の反抗は獨逸學問の夫れ以前の發達方針を脱せず、よく其方針中に保持され得た事は、吾人の特に注目すべき點である。獨逸學問の夫れ以前の方針に於て、實證主義の主張する處の、個人が

客觀的勢力に依存すると見る見解は、夙に充分に、殊に浪漫主義の民族精神説に於て、尊重されて居たが、夫れと同様に又個人格に全く活動の餘地を認めず、人間共同生活關係を確乎たる法則に従はしめんとする、其の見解の偏局なることも、矢張り夙に認められて居たのである。實證主義に對する反抗は、實際上舊方針に結び付て居た。社會法則の構想の排斥に於て、デイルタイ及びリツケルトは指導者であつたが、彼等は浪漫主義の思想との關係をよく意識して居たことは明らかである。されば歴史家ゲーツの如き人が今尙ほ、コント、バツクル及びラムプレヒトによりて、人格と共同團體との關係の問題が、始めて熱誠な論究に附せられた來た様に論ずるのは、不思議に感ぜられる。浪漫主義者及び彼等の社會から生れたる諸學派、即ち歴史法學派、日耳曼文獻學一般言語學、藝術史、政治史、歴史經濟學派等の著作を繙くと、吾人は其の中に、個人と共同團體との關係に關する有益なる考察が、豊富に存在するを見出すので、實證主義の輸入によりて、獨逸に於て個人と共同團體との關係の論争時代が始めて開かれたとは、決して云ひ得られないのである。

獨逸學問に於て、人間共同生活關係の問題が、如何に盛んに論究されて居るかは、歴史家、神學者、藝術史家、文藝史家、言語學者、文獻學者、法學者、經濟學者等の著作を見れば明らかである。而して其等の人々は、一般に左の諸點に於て一致して居ることが認められる。即ち一切の

歴史の作業は、與へられたる事情或は條件によりて制約されて居ること、併し歴史に於ける成期的なるものは、決して單に一般的發達から生起するものでないこと、此處には寧ろ創造的天才が諸勢力の活動中に入り込んでくること、一般に何れの歴史的現象も、全く既存のもののみから説明され得ないこと等である。彼等は一般に「精神物理的因素の作用の神秘的法則」に反對し、嚴格なる法則を表示せんとする一切の命題を排斥して居る。要するに獨逸學問に於ては一般に、共同團體、客觀的勢力、環境等の作用が重要視されて居ると同時に又、之れに對する個人の獨立性が高調されて居るのである。而して人間共同生活關係の問題に關して、吾人が獨逸學問から與へられる諸説明に比すれば、實證主義の成業は大に劣つて居ると思はれる。佛國の實證主義者は、獨逸の實證主義者よりも成就せる處多い。しかも彼等の成業に於ては有効なるものは、實は彼等が實證主義の主旨に反して遂成せるものである。

獨逸學問に依て行なはれたる實證主義の根本的排斥は、偏局なる經驗主義が勢力を振へる時代に於て、既に成就されて居た。而して其後新哲學時代が發達するに従ふて、其の排斥は愈々完全に、愈々鋭く愈々意識的になつたのであるが、此の方針に於て特に功績を認めらる可きは、ディルタイ、ウインデルバント、リツケルト、オイツケン等の哲學者である。尙ほ法學者シュタムラーも同様なる方針に於て多くの方面に影響を及ぼした。而して此の時代及び此等の研究の特色は、

つまり經驗的研究の最善の傳説を固持するに就て、出来るだけ概念的明亮を得んが爲めに大に努力すること併し夫れと共に、歴史的現象の價值、及び其の廣大なる結合并に原由に關する問題を、大に重要視することである。

此處に右の方針に従へる獨逸の學者が、實證主義或は實證主義社會學を排斥しながら、しかも夫れと同じく社會學的問題、人間共同生活關係の問題を研究し、又其の研究が實證主義社會學よりも一層正當であることを二三の例を擧げて示して置きたいと思ふ。例へば經濟階段説に付て考へんに、實證主義者は經濟階段を、確乎たる一の歴史的發達の諸節、嚴密なる一の歴史的法則の不變的表現と見る。併し此の如く解するに於ては、理論と經驗的に確定される事實との間に、必然的に隔離が生ずる。そこで歴史探究の齋らすものはどうでもよい、歴史的材料は只理論の裝飾に過ぎないものであると云ふが如くに論じて、以て理論を固持せんとする様な人々が出來てくる。

然るに獨逸學問に於ては、經濟階段は吾人が依て以て一時代、一國、一國民の經濟的關係を測定し、考察し得る理想的典型と見られて居る。此くて理論と事實との隔離が除去され、両者は適當に調和されることとなる。吾人は歴史的に確定されたる事實を、概念的範疇によりて測定し、之れに従ふて評價する處で、單なる資料蒐集家たるに止まる危險を脱し、又右の意味にて用ゆる概念的範疇は、事實を確定せんとするに當つて、決して吾人の目を眩らますことなく、吾人を正當

に指導するのである。而して經濟階段の範疇の此の如き運用は、實證主義及び自然主義に反對して考へ出されたるもの、隨ふて英佛から輸入されたる實證主義的、自然主義的社會學よりは、其の意義を一層正當に理解するものである。

次にマイネッケの著作に於て見られるが如き、新しき傳記學の方法に就て考へて見よう。此の方法に於ては共同生活關係、内外過現の諸影響の最も包括的な觀察が行はれ、共同生活關係は決して靜止しない分析に附せられ、而して其等の點に於て如何なる所謂社會學なるものも、之れに比適することが出来ないが、しかも亦個人は決して共同生活關係の内容及び作用によりて、全然説明し盡くされるものでないことが、常に證示されて居る。更に獨逸の史學界に於ては、歴史的現象の起源、發生、原因に關する無數の研究が公にされて居るが、其等の研究に於て、常に考へ得られるだけ最も包括的に、共同生活關係を考察せんとする熱誠なる努力が認められる。終りに一方に於てはマックス、ウェバー及びトレルチと、他方に於てはラハファル及びブレンタノとの間に行はれたるが如き、資本主義の本質及び起源に關する盛んな論争に就て考へて見れば其等の人々は何れも實證主義者でないが、しかも彼等は全く社會學的な研究を遂成して居ることは明らかである。要するに獨逸學界に於ては近來大に高上せる學問的熱誠及び活動は、一切の諸因素を包括的に考察する處の、共同生活關係の研究の大なる發達を齎らして居るのである。されど

夫れと同時に其の學問的活動は、歴史の現象を出来るだけ一二の一般的勢力の作用に還元し、又之を嚴密なる歴史的法則の結果或は表現と見んとすることの正當ならざるを、明らかに論證して居るのである。

今以上述べし事が獨逸學問の眞狀にして、獨逸學者の研究は健全なる意味の現實主義的精神と、超個人的因素を探索し、價值見地を發揮し、事物の結合を究明せんとする努力とを、適當に結合するものとすれば、他種の科學的研究法の爲めに之を押し退けんとする理由は、全く存しないのである。然るに文部次官ベツケルは「獨逸は社會學に於て後れて居る。社會學は獨逸的思考に適應しない。是れ社會學は一般的に只總合のみから成立するが故である」と云ふて居るが、夫れはつまり獨逸學問の成業に關する彼の無智と、社會學的問題の學的研究に關する彼の誤解とに基いて立てられたる謬見である。

フォン、ベロー氏は、夫よりベツケル氏の見解の謬妄なること、及び大學に社會學の教授職を設けるは無用なること、又有害なることを詳しく論述して居るのであるが、余輩が是れまで述べし同氏の見解以上に、此處に特に興味を感ずるは、社會學は總合的な一般的學問として成立し得ないものであると云ふ同氏の見解、及び一の特殊科學としての社會學の成立は、論理的には承認され得ないことではないとしても、大學に於て特に社會學の教授職を設けて、是れが研究及び教授に當らしめる必要はない、否な夫れは却つて有害であると見る同氏の意見である。それで是れより更に右の二點に關する同氏の見解の大要を述べることをとする。